

1995-27-①/3

二十一世紀を目前にして 人の過去と未来を考える

特別対談

山口昌男 (文化人類学)

橋爪大三郎 (社会学)

「ロマンのきつさ」は、人類絶滅という言葉にリアリティを与えた。宇宙船から見た「青い地球」は、運命共同体としての人類の姿を明らかにした。「チエルノブイリ」は、良識を離れた科学技術の非人間的な結末を鮮明にした。だが今、二十一世紀を考えると、これからの時代を象徴する映像が浮はらない……。今回の対談は、たまたまたふたりの話では、毒ガスに代表される不可視的な恐怖がそれにあたるのではないかと話になった。

確かに今、われわれの日常には、酸性雨、新種のウイルス、オゾンホール、食物の汚染といった「見えない」嵐が充満している。人口問題を考えるとき、時間というものもまた、そのひとつに数えていいだろう。解決のために与えられた時間と、破局のために用意された時間と、われわれは、どちらを短縮し、また延期させることができるのだろうか。

山口 ボタンを掛け違ったまま話が進むことがないように、まず文明というものに対しておたがいのような観念をもっているかというところから話をはじめよう。どうでしょうか。文明は人間に本當の平和をもたらしてきたのか……。

橋爪 たえば、今過ぎようとしている二十世紀を考えると、それは何と云っても「戦争」がテーマであった時代だったと思います。世紀の前半に二回、世界的な戦争があり、ちょうど真ん中あたりで核兵器が開発された。後半にはそうした戦争は起きませんでした。それは、戦争ができなかったと言っようほうが正しいでしょう。戦争準備の態勢だけは続いていましたから。

山口 これまで、ヨーロッパを中心にして世界が振り回されてきたというところがあると思います。キリスト教徒でなくとも、キリストの誕生を基準に、百年、千年を単位とする時間の観念で動かざるをえなかった。キリスト教世界がすべてを決定している構図が、当たり前ものとして、問い直されることもなかったわけです。世紀末という言葉にしても、こ

れはまさにキリスト教的なものと言えます。たとえば仏教の末法思想では、紀元千年ごろに終末観が訪れて、日本では、そういった思想を背景にして、「源氏物語」が生まれたという……。ところが明治以後、キリスト教に対抗できるような時間の取り方が現れてこなかった。イスラム世界は、独特のイスラム歴史をもっていますが、イスラムは中世以降、ヨーロッパ世界から押し出されてしまっています。それが社会主義の崩壊以後、世界にむかって独自の主張をはじめているのが、だんだん目立つようになっていきました。その結果、イスラムは戦争のひとつ、の原動力にもなってきたわけですね。実は、社会主義そのものも、宗教を否定しては、ほとんど否定したことがなかったんです。橋爪 確かに百年ごとの刻み自体には、たいお話しはないと思います。ただ、今のお話のように、ヨーロッパのキリスト教文明が世界の時間軸を握り、文明を支配してきたということは非常に重要な点であったと思います。それは、つい最近まで、変わらない現実だった。それがここへきて少し変質しているのではないかと感じるのが、あえて言えば現時点でのおもしろい部分だとも思います。

山口 これまで、ヨーロッパ・キリスト教文明の二十世紀における代表選手はアメリカでした。その挑戦者は最初ソビエト・ロシアという形で現れた。これはマルクス主義を標榜していましたが、いわば形を変えた宗教国家でもあったわけですね。そこは、東方キリスト教世界であると同時に、ロシアの民族性を兼ね備えた世界だった。だがこの挑戦は退けられ、次の覇権の行方は混沌としたなかにあると言えるでしょう。

中国 アジア諸国が、その担い手として今台頭してきているわけですが、中国はもとよりヨーロッパ・キリスト教文化圏と無関係な存在でして、二十世紀に入ってからマルクス主義を受け入れる過程で、一時キリスト教的だった時期がありました。現在、脱イデオロギー化を進めて本来の中国のアイデンティティに戻りつつあるように思います。それと同時に世界の主軸国として登場しようとしてい

る。これはヨーロッパ・キリスト教文明が独占していた地球の覇権が、だんだん拡散しつつあることを意味しているのではないのでしょうか。山口 中国には直接関わったことがないのですが、これは人から聞いた話ですが、とにかくかつては画一的であった中国の人たちが、北京などでは非常に多様な生活を楽しまれているという。たとえば、朝早くから近くの公園で大勢の中国人が体操をしているのを見て、それがそれぞれ勝手に集まって、グループをつくってやっていたのがわかるんだそうです。こういったことがだんだん生活の基調になってきている。

現在、身体感覚の相違は全世界的に現れてきている現象ではないでしょうか。たとえば日本ではまだラジオ体操のような画一的なものが続けられている。これはもともとデンマークの体操からきているもので、本来は体を解放する性格が強かった。そのために音楽を使っていたんです。ところがその流れを取り入れたはずの日本のラジオ体操は、号令中心のものになってしまった。これは号令がなければ動けないという日本人の身体感覚を反映した結果でしょう。

山口 中国のほうは、いったんその方向を、中国のほうは、いったんその方向を、

かんでしまえば、日本人より先に行くのではないかと思えます。それは一方では若い人たちの間の性の解放として進んでいるようです。

逆には日本では、体が野放しになって、精神も含めた身体観が未熟なままになってきている。「魔法使いの弟子」というデニカスの曲がありますが、これは呪文の止め方を知らないで弟子が呪文を使ってしまう、たいへんな結果を招いてしまうという物語です。最後には、帰ってきた師匠が魔法を止めてくれるという筋ですが、現在の文明は、その師匠なきまま弟子が魔法に手を出してしまったという状態ではないでしょうか。

第三世界と勤勞精神

橋爪 今の話を私なりに考えてみますと、それは労働とか、教育とかいう問題であろうと思います。自然科学が産業に応用され工業生産力が爆発的に拡大する。これは、理屈の上からは世界中で起きてもいいことだったわけですが、しかしそれが実際に起きたのは「勤勞」という考え方をもちた人々の間だった。つまりそれは、キリスト教徒、とくに宗教改革を起こした人々だったわけですね。その次に、日本が良い例だと思いますが、キリスト教に関係ない地域が産業化に成功し、キャッチ・アップに成功する場面が出てきます。しかし、ここにもたぶん、キリスト教的な「勤勞」とは違った形での「勤勞」があったのではないかと考えられます。

山口 ところが現在、こういう「勤勞」という文化の土台をもっていないさまざまな国々に、国際分業で工場がたたく建つてしまっている。中国もいわゆる「勤勞」精神とはいへん異質な部分をもっている

ると思うのですが、教育や規律訓練の素地がない社会や、別系統の教育や規律訓練に携ってきた社会が、市場経済化して世界単一市場のなかに入り込むようになっている。ここで今まで経験しなかった問題がいろいろ起きているということもあるでしょう。

山口 「勤勞」の伝統を、日本の社会のなかで辿って見ますと、江戸時代には二宮尊徳のような人物を例にして、それは道徳というか「徳」というような概念で捉えられてきたと思います。仏教においても「徳」を積み上げるために働くといいった精神的伝統があったでしょう。それが明治以来の機械化の波のなかで、解体していったことは確かです。

橋爪さんからプロテスタントのお話が出ましたが、プロテスタントのもつていた「勤勞精神」は確かに技術と結び付いて開花しましたが、一方で労働そのものを抽象的な価値に変えてしまったという面も指摘できます。日本の場合もプロテスタントの場合も、それに抵抗できなかった。たとえば日本の場合、商家の心得とか、家訓といった形で労働の価値を説く風習があったのに対して、国家的なものにはそういうものはなかった。要するに人間は軍隊なら軍隊を構成するひとつの単位にすぎないとみなされてしまったわけですね。それまでは人間を取り囲んでいる精神的なものや、もっと広い環境と運動しながら生きていて、それに合わせて仕事割り当てられ、仕事そのものも全体を活かすものとして機能していた。そしてまた全体によって身体を含めて個人が活かされるという相互的な関係がある程度維持されてきたのが、人間はそこから切り離されてしまった。

が、それを推し進めている。伝統社会のなかで生きていた人々や第三世界としても、市場に参加する以上、どうしても市場の側に合わせる以外、生き残る道がない。

昔、人間の身体は、とりあえず自然の条件に制限されるだけでいい。農業が始まって、大部分の人々は労働に人生の大半を費やさなければ、生存が危ういわけですから、農業労働に縛られていた。しかし産業社会を迎え、そういう拘束から身体は一度解放された。そこで近代の意味での規律訓練とか教育とかが意味をもつてくる。もしこれを受けないとすると、それは労働力とは見なされず、すなわち所得がないということになります。第三世界の人々の「貧困」は、もとも貧困だったというよりも、こういう規律訓練を受ける土台が欠けているために市場のなかで所得を得る道がないという意味だと思っております。

山口 結局、人間は必要とする環境より遙か遠くへ来た文明

もはるかに多くのものを与えられてしまっている。それが生活のスタンダードになってしまっていますから、それをすべて自分でコントロールしながら生きていくことはほとんど不可能になってしまったというところでしょう。

僕はあるとき西アフリカの奥地、ナイジャールのほとりの部落でひとりで調査をしたことがあります。そこでは簡素であるがまさに自然と調和した暮らしが続いていました。川で泳いだり、中州の砂の上に寝転がったりしていると、なんとも言えない充足感があって、ほかのことを知らないかという気がして、たまたま家は日干しレンガでつくられていて、泥と藁をこねて枠の中に入れて置いておく、それで立派なレンガになる。それを積み重ねていって、別に木で屋根を組み立て、それを乗せると家ができてしまう……。

は決して無駄ではないと考えるのです。橋爪 私はこんなふうには思いません。今話されたような自然と調和した人間のあり方、それは人間らしいあり方であるけれども、今のわれわれにとってはまったく非現実的なあり方になってしまっています。それには、量の問題があると思いた。そこには、量の問題があると思いた。地球上に今住んでいる動物の体重の合計をパーセントで示してみると、いちはんが牛で、二〇パーセントを占めて、その次は人間で、ほぼ同じ割合。それから豚といったように続いている。人間は本来数ある動物種のひとつにすぎないのに、総重量で第二位というのは多すぎます。もしお話のように自然と調和した暮らしをしていたら、たぶん、一パーセントにもならなかったはずなんです。

要するに人間は自然との調和を犠牲にして食料を調達し、自分たちを増やしてきたわけです。まず農業を始めたことで人口は増え始め、産業社会に入ってから爆発的に増加しました。産業社会は市場を媒介して（つまり、自然とのやり取りを媒介せず）、人間と人間の関係だけで物質を運営するシステムです。ところがもうひとつのシステム、人間の数をコントロールするシステムは、実は市場の外側にある。これはつまり「家族」なんです。物を生産するメカニズムが根本的に変わったのに対して、この「家族」のシステムは本質的に変わっていない。現在の人口問題は、このアンバランスな構造が背景になっていると思えます。

もし今、家族のシステムを手をつけなければ、現在の地球上の人口六十億は、二〇五〇年には百億になると推計されています。そのあと百五十億、二百億となつてまっしぐらに破壊に向かうか、それ

とも何かうまい方法で人口を頭打ちにできるか。そこは見解の違があるのですが、二〇五〇年に百億になるという数字では、ほとんどの専門家の意見が一致しています。この百億という数字は膨大なものですよ。

問題を深刻にしているもうひとつの要素は欲望です。すべての人間がますます豊かになっていこうと思つている。しかも豊かさの定義は市場のなかで物が買えるかどうかということになってしまった。この傾向が続く限り、あまり明るい未来は描けないでしょう。そのことにわれわれは気がつかないふりをしていて、これも、これは差し迫った現実なのだということを肝に銘じておく必要があると思ひます。

機械との「ミニゲーム」

山口 何が本当の豊かさなのかという確たる信念もなく動いているわけですね。ビジョンもないままに、ただ現状を変えていくことだけが目的になってしまつていて、それを時には進歩と呼んだりもしている。今の時代には、変わるということに對する抵抗があつてもいいのではないかと感じています。

たとえば、新しい電子メディアがでてきても、そこで人間のコミュニケーションが効率をあげていないのかというところ、かならずしもそうではない。規模は拡大していても、質的にはかつて人が行き来して伝えたり、伝えよこつたりしていた状態とそう変わらない部分がある。結局、科学技術が発展しても、それを使う人間がやっていることにはそんなに違いはでないのではないかと思ひます。

もうひとつ機械について言えば、人は本来機械を楽しむべきだと思ひます。

日本の場合には、ちょうど機械が入ってきたとき、徳川幕府によって、機械を戦争と生産の手段として使つてはいけないういうコントロールがされた。では、どういう形で機械が人々のなかに広がつていったかというところ、まず時計です。時計が壊れたとき、徳川家康は鍛冶職人に修理に出したんですが、職人は修理を終わらしたときには、すつくり自分で同じ物を作ることのできる技術を身につけてしまつた。その知識が広がって、時計ばかりでなく、歯車とか滑車とかポンプとか、その原理を拡大し、自動人形をつくつて劇場に応用してしまつたんです。歌舞伎や人形浄瑠璃の舞台にも使われていまして、現在でも鹿児島県の知覧というところでは、からくり人形の伝統が残っています。日本人の機械への感覚は、むしろ友達と遊ぶという感じのものだったわけですね。

これはヨーロッパ人の感覚とはずいぶん違つています。ヨーロッパの場合はカバラの信仰があつて、ユダヤの知者はカバラの手法を使つて、さまざまなものを呼び出すことができると考えられていた。それを人間が機械という形に作り替えていったような経緯があります。それは神の賜物であるかもしれないが、また悪魔の産物かもしれないと思ひますが、ヨーロッパの人々は機械に対して半信半疑という立場を貫いてきた。これは日本のように機械を家畜のように可愛がつたというのとは、まったく違つた感覚であつたと思ひます。

しかしここに至つて、機械のほうが発達して、そういった人間の感情移入を受け付けなくなっていく独自性をもつてしまつた。このあたりの、人間と機械のコミュニケーションがなくなる危険性について、すでに手塚治虫が言つていることで

Yamaguchi Masao
1931年北海道生まれ、東京大学文学部国史学科卒業、東京大学大学院社会学研究科社会人類学博士課程修了。文化人類学者、評論家、東京外語大教授。国際感覚にもとづいて、「トリックスター論」や「中心と周縁理論」など分野をまたがる仕事にも定評がある。著書に「文化と両性性」、「病いの宇宙論」など多数。



てられる。それから本来なくなるべき差異、代表的なものも貧困ですが、こういうものはむしろ広がつていく恐れがある。これは市場に任せておいて解決できるものではない。市場は人々の欲望を喚起し、人々を欲望のままに結びつけてはいますが、そこに強固な連帯を作り出す力はないように思ひます。

もしも人類が破局を迎える前に解決を図ろうとするなら、それは市場や産業主義のなから生まれてくる何かではなく、それとは違つた、あるいはそれを超越した、思想のようなものではないかと

魅力ある差異をもてるよう人間を育てていくはずの教育が、現在の日本ではまったく反対の方向にいつています。今後、魅力ある日本人はますます少なくなっていくと思ひます。

photographs by Matsubara Kenji

